

「クラシック」と「ポピュラー」をつなぐもの

Classical Tradition in Early Popular Music and Jazz

吉成 順
YOSHINARI Jun

「クラシック」と「ポピュラー」という2大カテゴリーは1860年代に成立し、20世紀を通じて音楽界全体に大きな影響を与えた。およそ1920年代まで両者には様式上の共通性 (common practice) が認められたが、ジャズの登場をきっかけに両者の乖離が進んだ。しかし歴史を眺めると、「クラシック」の伝統がジャズの中に受け継がれている例や、現在「クラシック」として扱われているものが実は19世紀の「ポピュラー」の文脈から成立したものだ、という例を見出すことができる。本稿では前者の例として金管楽器における「グルベット変奏」の伝統、後者の例として20世紀初頭の「サクソフーン熱」を眺め、一見対立や乖離と見られる「クラシック」と「ポピュラー」の間にしっかりとしたつながりがあったこと、これまで等閑視されがちだった19世紀の「ポピュラー」音楽文化の影響に再認識が必要であること、を確認する。

キーワード：クラシックとポピュラー、変奏曲、サクソフーン熱、吹奏楽、ヴォードヴィル

0. 序

拙著『〈クラシック〉と〈ポピュラー〉』（吉成2014a）は、「クラシック」と「ポピュラー」という、20世紀の音楽文化に広く影響を与えた二項対立が、おおむね次のような段階を経て成立したことを明らかにした。

1. 19世紀初頭のヨーロッパ各地で特定少数の作曲家たち（の作品）が「古くても価値がある」と見なされるようになり、「古典 classic」と称されるようになった。
2. 1850年代のイギリスで、「理解しやすく」「新しく」「民衆的」な音楽が「ポピュラー音楽 popular music」と総称され、その主たる流通の場であるミュージック・ホールの隆盛とともにひとつのカテゴリーを形成するようになった。
3. 「新しい」ものはそのうち古くなり、人々の多くにとって「理解しにくく」、したがって「民衆的」ではなくなる。このように popular music としての条件を失いつつも、ある程度の知識や経験があれば楽しめるレパートリーは、本来は特定少数のはずだった classic に追加されるようになり、classic は増殖して、「クラシック音楽 classical music」というカテゴリーを形成した。

19世紀に充分「ポピュラー」であったロッシェニやヴェルディのオペラ、ヨハン・シュトラウスのワルツなどは、今では「クラシック」と見なされている。「新しさ」を失ったからである。だが、そうした「ポピュラー」から「クラシック」への移行がさほど抵抗なく行われたのは、19世紀の「ポピュラー」と「クラシック」の間で様式上の違いがあまり顕著でなかったからであった。近年の英語文献で散見する用語を用いれば、どちらも common practice⁽¹⁾ の音楽語法の中におさまっていたから、と言っても良い。

1920年代頃から、事情が少し違ってくる。端的に言えば、「ポピュラー」と「クラシック」の様式的・文化的な乖離が強くなったのである。前掲書のフォローアップとして書いた小論（吉成2014b）の中で指摘した要因を

まとめておく。

1. 「クラシック」の中でも新しい「現代音楽」の語法がひとときわ難解になる一方、アメリカで登場したジャズが従来の「ポピュラー」になかった新鮮な音楽語法によって「ポピュラー」全体に影響を及ぼし、結果として「クラシック」と「ポピュラー」の様式上の乖離が大きくなった⁽²⁾。
2. 録音技術の発達がレコード産業やラジオ放送の普及を促し、とくに「ポピュラー」が消費財としての性格を強め社会的影響力を増大させたことによって、「クラシック」と「ポピュラー」の存在性の違いが際立つようになった。
3. 「クラシック」に「新古典主義」が流行し、演奏の場では「楽譜に忠実であること」がドグマのようになって、古来「クラシック」においても不可欠であった即興演奏が衰退していくのに対し、「ポピュラー」では、とりわけジャズの領域で顕著なように、アドリブやフェイクといった即興の要素が重視され続けた。

こうして生まれた「クラシック」と「ポピュラー」の乖離は1950年代以降ますます強くなるが、その一方で1980年代あたりから、たとえばジャズにおける「新伝承派」のあり方に見られるように、「ポピュラー」の中にも「クラシック（古典）」的な存在性を示すものが多くなる。それを踏まえて上記小論の時点では「クラシックの増殖はこれからもとどまることはない」と結んだ。

だが、今の実情を見ると、その表現にはいささかの修正が必要である。「クラシック」的な存在性を示すものは増えても、それらはけっして「クラシック」に組み込まれようとしない。「ジャズ・クラシックス」「クラシック・ロック」などと銘打たれて、あくまで「ジャズ」「ロック」の中に留まろうとする。そもそも21世紀の今、もはや「クラシック」と「ポピュラー」を音楽文化の2大カテゴリーと見なすことはできなくなっている。「ポピュラー」はますます多様化と細分化を重ね、「ポピュラー音楽」という大きなカテゴリーの存在がかすんでしまっ、あまたの「小さなカテゴリー」が並列している状態である。一方の「クラシック」はどんどん縮小し、「ポピュラー」の中の無数の「小さなカテゴリー」と並ぶ⁽³⁾。19世紀半ばに生まれ、20世紀のほぼ全体にわたって多くの人々の音楽文化観を支配してきた構図は、もはや成り立たなくなったのである。

さて本稿は、こうした「クラシック」と「ポピュラー」の変遷の中で、20世紀の前半、ジャズの台頭によって「ポピュラー」と「クラシック」の乖離がひとときわ進んだ時期に着目する。乖離はけっして分断ではなく、よく見ると相互の文化的・歴史的なつながりが認められる。「ジャズ」は「クラシック」的（= common practice 的）伝統に対して異質なものとして登場したように見えるが、実はそのジャズ文化の中にも「クラシック」の伝統が脈打っている。また現在「クラシック」の文脈で語られるアーティストが、実は19世紀の「ポピュラー」文化、大衆的音楽文化の流れから出てきている。そんな例を通して、「クラシック」と「ポピュラー」のつながりを確認することが本稿の目的である。

1. *Minka* とグルペット変奏の伝統

1.1 スパイク・ジョーンズの *Minka*

1940年代50年代に一世を風靡した冗談音楽楽団、スパイク・ジョーンズ Spike Jones (1911-1965) とシティ・スリッカーズ⁽⁴⁾のナンバーに *Minka* という曲がある。トランペットのジョージ・ロック George Rock (1919-1988) をフィーチャーしたもので、初録音は1946年5月、演奏会でもしばしば取り上げられ、1956年収録のTV ショーでも取り上げられる人気曲である (Mirtle 1986, Young 1982)。

曲名の *Minka* はロシア民謡のタイトルで、古くから中央ヨーロッパでも知られており、ベートーヴェンも変奏曲を作っている。こんな主題である (譜例1)。

譜例1 ベートーヴェン《10の主題と変奏曲》作品107より第7曲〈ロシア民謡〉主題



スパイク・ジョーンズの *Minka* も変奏曲仕立てになっていて、録音⁽⁵⁾ではレチタティーヴォ風のイントロで始まって4つの変奏が続く。印象的なのは最初と最後の変奏がどちらもグルベットの（旋回音型）の繰り返しによる変奏のスタイルを取っていることである。第1変奏は16分音符によるグルベットの（譜例2）⁽⁶⁾、第4変奏は32分音符のグルベットの（譜例3）。

譜例2 16分音符によるグルベットの例



譜例3 32分音符によるグルベットの例



こうしたタイプの変奏を、ここでは「グルベットの例」と呼ぶことにする。

スパイク・ジョーンズとジョージ・ロックによる *Minka* は、序奏や第2・第3変奏については彼らのオリジナルと思われるが、第1および第4、2つのグルベットの例にはいくつかの先例を辿ることができる。

1.2 ハリー・ジェイムズの *Concerto for Trumpet*

先例の一つは、スイング時代のトランペットの名手ハリー・ジェイムズ Harry James (1916-1983) による *Concerto for Trumpet* (1939) である。ジャズ・ナンバーのタイトルが「コンチェルト」というのも珍しいが、曲の内容もジャズらしくない。バックのサウンドは確かにジャズバンドのものだが、楽式的にはクラシックのヴィルトゥオーゾ的な幻想曲やラブソディを思わせる。短い単一楽章の曲ながら終始トランペットが超絶技巧を披露するという点では「コンチェルト」の名もうなずける。

大雑把に「序奏と3部分とコーダ」のような形をとる。1) 冒頭、シンプルなアコードの導入を受けて、トランペットが情熱的なレチタティーヴォ風＝カデンツァ風のソロを聞かせる。テンポ感はない（序奏）。2) その後シンプルで軽快なリズムを背景にトランペットがパラパラと半音階を織り交ぜながら16分音符で動く。どことなくリムスキー＝コルサコフの《くまばちの飛行》を想起させる（第1部）。3) 伴奏のリズム・パターンが変わりスイング感を強めると（第2部）、トランペットが比較的自由に歌い出す。ポルタメントやハーフ・ピストンを多用したトランペットは、背後のトムトムの響きと相まって、いわゆる「ジャングル・ミュージック」⁽⁷⁾の雰囲気醸成（第2部）。4) 次にバンドから聞こえてくるのは件のロシア民謡 *Minka* のスイング・バージョンで、それに導かれてトランペットが、先の譜例3と同様のグルベットの例を繰り返す（第3部）。5) その

後またフリー・リズムのアコードが響き、トランペットのレチタティーヴォ風の独白で曲を閉じる（コーダ）。

第3部の *Minka* のトランペットは、スパイク・ジョーンズのものとは主題のメロディー・ラインが少し異なるものの、変奏の装飾的な動きはほぼ同じと言ってよい。

この曲の成立について、ハリー・ジェームズの息子で本人もトランペット奏者であるチャック・パーデューは、こう書いている。

私は一度、父ハリーに《コンチェルト》がどうやってできたのか聞いたことがある。父が言うには、10代の頃から《くまんばちの飛行》を吹いてきた。《コンチェルト》のアイデアが浮かんだのは、何人かのミュージシャンたちに「《くまんばちの飛行》なんて簡単さ、後ろからだって上下さかさまにだって吹ける」と話した時だった。そう、実質的に《コンチェルト》の第1部はまさに《くまんばち》を上下ひっくり返したものだ。父は中間部が《シング・シング・シング》だということにもうなずいた。そして最後のコーラスは、ハーバート・L・クラーク編曲の《ヴェニスの謝肉祭》に基づいている (Par-Due 2020: 33)。

この回想は、当たっているようで完全には当たっていない。第1部が聴いての印象通り《くまんばちの飛行》に由来することは確認できたが、《コンチェルト》の実際の音の動きは、《くまんばち》の逆行形でも反行形でも、逆行の反行でもない。第2部は、確かに背景のリズムが《シング・シング・シング》の中間部を思わせると言えなくもないが、有名なメイン・テーマが出てくるわけでもなく、特定の曲というよりは「ジャングル・ミュージック」のスタイル一般を踏まえたものと見てもよさそうだ。そして第3部。この旋律はけっして《ヴェニスの謝肉祭》ではなく、明らかに *Minka* である。クラーク編曲の《ヴェニスの謝肉祭》にも似たようなグルベット変奏の部分があるので、「クラークが《ヴェニスの謝肉祭》でやった変奏の仕方を父が *Minka* に応用した」とパーデューは考えたのかもしれない⁽⁸⁾。だがたぶん、そうでもない。この第3部には、明確なさらなる先例が存在する。ジュール・レヴィの《ロシア大幻想曲》*Grand Russian Fantasia* である。

1.3 ジュール・レヴィの《ロシア大幻想曲》

ジュール・レヴィ Jules Levy (1838-1903) はイギリスとアメリカで活躍したコルネット奏者である。1860年代にコヴェント・ガーデンのプロムナード・コンサートやクリスタル・パレスのオーケストラで活躍した後、演奏旅行をきっかけにアメリカ移住、セオドア・トーマスのオーケストラでソリストを務め、その後はギルモア・バンド (1875-80) やコニー・アイランドのショー (1880's) でも活躍。90年代には全米をツアーして回ったという (Foreman 2010)。

レヴィの代表作である《ロシア大幻想曲》はコルネット独奏と吹奏楽の曲で、作曲年代ははっきりしないが、出版は恐らく1875年頃だと思われる⁽⁹⁾。副題に「主題と変奏」とあるが、実際に用いられているロシアの旋律は3種、そのうちひとつだけが変奏を伴っている。序奏を含めて6つの部分からなる。1) 序奏はアレグロ・モデラート、ヘ短調の劇的なもの。2) アンダンテに転じ、コルネット独奏がロシア民謡「赤いサラファン」をゆったりと奏する。短い間奏を挟んで3) コルネットによる *Minka* の主題（「主題」と明示されているわけではない）。間奏を挟んで4) 「変奏1」と明示された、*Minka* の16分音符によるグルベット変奏。メロディー・ラインはスパイク・ジョーンズと同じである。また間奏を挟んで5) 「変奏2」と明示された、*Minka* の32分音符によるグルベット変奏。これもスパイク・ジョーンズと同じ。その後マエストーソの間奏に続いて6) 「フィナーレ」は帝政ロシアの国歌。コルネットはそれをトリプルタンギングのきざみで飾り、その勢いそのままカデンツァに入っ、曲を閉じる。形式的にはタイトル通りポプリ的な「幻想曲」であり、その核となっているのが *Minka* による2つのグルベット変奏なのである。

この曲は19世紀末から広まり、コルネット／トランペット奏者の定番となったようである。パーデューの回想に出てくる往年の名手クラーク⁽¹⁰⁾も、現代の名手マルサリス⁽¹¹⁾も録音している。この曲が「Minkaによるグルベット変奏」の始まりであったと考えて間違いないだろう。

1.4 アルバンとグルベット変奏

「Minkaによるグルベット変奏」はレヴィが大もとどとして、グルベット変奏自体はもう一段階さかのぼることができる。「金管奏者のバイブル」とも呼ばれるアルバン（アーバン）の教則本である。

アルバン Jean-Baptiste Arban (1825-1889) はトランペット奏者や指揮者として活動するかたわら軍楽学校でサクソルンの教員となり、その後パリ音楽院コルネット科の教授も務めた。独奏楽器としてのコルネットの可能性を拓いた存在とも言われている。そのアルバンが1864年に出版したのが、くだんのバイブル『コルネットとサクソルンのための完全な大教程』*Grande méthode complète pour cornet à pistons et de saxhorn* である。全243ページに及ぶこの教本は大きく2部に分かれ、第1部が全7項⁽¹²⁾からなる体系的な教程、第2部は具体的な曲例として『14の特徴的な練習曲』と『12の幻想曲と変奏曲』が収められている。第1部の第5項は装飾音に関する項であり、「グルベット」「前打音」「ポルタメント」「トリル」「モルデント」と分かれる。装飾音の最初がグルベットなのである。「グルベットのための準備練習」の第1曲はこんな風で、

譜例4 アルバンのグルベット練習第1曲



第2曲はこうである。

譜例5 アルバンのグルベット練習第2曲



それぞれ譜例1と譜例2の形につながる事が分かるだろう。

こうした練習の成果として、第2部の『12の幻想曲と変奏曲』の中にグルベット変奏の実例が出てくる。12曲中グルベット変奏を含むのは3曲あるが、その最後のもの、第12曲が有名な《ヴェニスの謝肉祭による変奏曲》である。「当時のコルネット独奏曲の中でもとりわけ優れたもの」(Tarr 2001)と評されるこの曲の第4変奏はこんな風で、

譜例6 アルバン《ヴェニスの謝肉祭》第4変奏



譜例2の形とつながる。

《ヴェニスの謝肉祭による変奏曲》はパガニーニを嚆矢としてさまざまな楽器のために作られているが、本家のパガニーニにも、またアルバンと並んで有名なジュナンによるフルート用変奏曲にも、こうしたグルベット変

奏曲は見られない。一方、トランペットやホルネットの文脈では、パーデューが言及していたクラークの《ヴェニスの謝肉祭》、あるいは先ほどのレヴィの《ロシア大幻想曲》をはじめとして、さまざまな例がある。

パリ音楽院の教授という、いわば「クラシック」の正統が生み出した変奏の伝統が、プロムナード・コンサートや吹奏楽のような民衆的な演奏会に拡がり、更には20世紀のジャズや冗談音楽のTVショーにまで受け継がれていくのである。

2. ジャズ以前のサクソフォーン熱

サクソフォーンという楽器がポピュラーになったのはジャズで使われるようになったからだ、というのが一般の通念だと思われる。だが考えてみれば、初期のジャズ（ニューオーリンズ・ジャズ、ディキシーランド・ジャズ）ではサクソフォーンよりもクラリネットの方がよく用いられていた。サクソフォーンが主流になるのは1920年代半ば、ジャズが中心がシカゴに移ってからである。なぜクラリネットからサクソフォーンに変わったのか。さまざまな要因が考えられるだろうが、その大きなきっかけの一つが、その頃アメリカに巻き起こっていたサクソフォーン旋風、サクソフォーン熱 saxophone craze だと思われる。サクソフォーンがジャズに浸透する以前に、サクソフォーンのブームが起こっていたのである。「第一次世界大戦につづく十年、合衆国では百万本近いサクソフォーンが売られ」という（シーゲル2010: 41、表記は原文のまま）。ミズーリ州カンザスシティでは「夜10時半から朝6時までの間はサクソフォーンを吹いてはいけない」という時間制限まで定められた（Garfield 1989）。

こうしたサクソフォーン熱はどこからきたか。シーゲルによると、まずギルモアのバンドがアメリカとしては先駆けてたくさんのサクソフォーン奏者を採用した。それがスーザ・バンドなどにも伝わる一方、ミンストレル・ショー、サーカス、ヴォードヴィル一座そしてダンス・オーケストラなどへ拡がっていく。当時の大衆的エンターテインメントのあらゆる領域にサクソフォーンが進出し、その中からスターが生まれていく（シーゲル2010: 72）。

たとえばトム・ブラウンとその兄弟たちからなるシックス・ブラウン・ブラザーズ。リーダーで次男のトムはミンストレル・ショー由来の黒塗り、ほかの5人は白塗りで、みんな道化の衣装を着て演奏・演技する。カナダ出身、北米各地のミンストレル・ショーやヴォードヴィルの舞台上で活躍し、ブロードウェイにも進出した。音楽はラグタイム風で、たくさんの録音も残している（Vermazen 2001）。

図1はアメリカを代表するサクソフォーン・メーカー、ブッシュャー社の広告に登場したブラウン・ブラザーズである。「みんなが一台ずつ〔楽器を持って〕演奏する Everybody's Playing One-」というキャッチコピーに、当時のサクソフォーン熱の様子がうかがえる。

独奏者としてサクソフォーン熱をひときわ燃え上がらせたスターは、ルディ・ヴィーデフト⁽¹³⁾ (Rudy Wiedoeft, 1893-1940) である。デトロイトの音楽一家に生まれ、子供の頃からファミリー・オーケストラの一員としてカフェやホテルの舞台上に立った。最初はヴァイオリン、その後クラリネットを吹いた。20歳過ぎからサクソフォーンを始め、その2年後にはニューヨークに出てミュージカルのピットで演奏、ダウン・ビート誌の批評で「ルディの演奏はとてもスリリングで、舞台上の歌手よりもたくさんピットの中からお辞儀をしていた」と称賛された。

その後舞台を離れ、自分のバンドを組みつつソリストとしてもエジソン社と契約してたくさんの録音を行なった。

とりわけヒットしたのが1918年の《サクソフォビア》である。音楽スタイルはラグタイムというよりポルカに近いオーソドックスなものだが、速



図1 ブラウン・ブラザーズが登場するブッシュャー社の広告

いパッセージと切れの良いタンギング、フラッター・タンギングやポルタメントなど多彩な技が繰り返り広げられて息つく暇もない。

《虚しいワルツ Valse Vanité》などはクライスラーを彷彿とさせるし、レパートリーにはベートーヴェン、チャイコフスキーなどの編曲も多い。演奏技巧上のショーマンシップはともかくとして、音楽的にはかなりクラシカルな伝統の流れの上に立っている。実際、ヴィーデフトは1926年4月17日、クラシックの演奏会場として知られるエオリアン・ホールでクラシック中心の演奏会を行なっている。サクソフォーン四重奏でバッハやチャイコフスキーを演奏し、この演奏会のために新作も委嘱した。ある音楽雑誌は「サクソフォーンとそのアンサンブルが、真っ当な演奏会の領域に初めて完全かつ満足すべき登場をした」「この楽器は独奏楽器として優れているだけでなく、同族楽器のアンサンブルでも真の古典（classics）の編曲を妥協することなく完璧に音で描き、独特の魅力的な色彩を奏でた」と評している（Cottrell 2012: 166）。ちなみにこの演奏会はラジオで中継され、100万人以上の人が聞いたという⁽¹⁴⁾。

ところで、*Classicalmusicnow* という、文字通り「クラシック」に関するサイトがある。クラシック関係のフランスの楽譜出版社が、自社の出版物を紹介しつつその作曲者に関する情報を提供している。そこにヴィーデフトのページがある（Musik Fabrik Musik Publishing 2011）。この出版社は、ヴィーデフトの楽譜を全10巻の作品集として出版しているのである。つまりここでは、ヴィーデフトは「クラシック」の作曲家として位置づけられている。「サクソフォーンといえばジャズ」というイメージが定着する前の「サクソフォーン熱」を牽引したヴィーデフトは、当時の「ポピュラー」、大衆音楽文化の脈絡から生まれた。それが現代では「クラシック」に位置づけられている。

3. まとめ

アルバンの金管教本にはじまるグルベット変奏の系譜は、19世紀後半の吹奏楽文化や大衆的演奏会を通じて20世紀のジャズに、そして冗談音楽に浸透していた。本稿ではハリー・ジェイムズの《コンチェルト》を取り上げたが、実はクラリネットのアーティ・ショー（Artie Shaw, 1910-2004）もクラリネット用の《コンチェルト》*Concerto for Clarinet*（1940）を書いている。伝統的な協奏曲の枠からは外れているが、その独自性や意欲においてはハリー・ジェイムズをしのぐものがある。更にハリー・ジェイムズもアーティ・ショーも、コンチェルトだけでなく教則本も書いており（James 1941, Shaw 1941）。実はサクソフォーンのヴィーデフトも、教則本を書いている（Wiedoeft 1927）。20世紀前半の「ポピュラー」文化は、19世紀以来の「クラシック」文化とそのままつながっているのである。

20世紀初頭のサクソフォーン熱も、吹奏楽やヴォードヴィル・ショーといった19世紀の「ポピュラー」文化が母体となって起こり、それがジャズにおけるサクソフォーンの台頭へのきっかけとなった。

アーティ・ショーの活動は、一般に「第三の流れ」Third Streamと呼ばれる「クラシックとジャズの統合あるいは止揚」の例として語られることが多いが、歴史を正しくたどるなら、ジャズとクラシックは最初から対立していたわけではなく、少なくとも1920年代以降は、クラシックの流れはジャズの中にもしっかりと流れ込んでいたのである。それをあえて対立と見、そこに統合をもたらそうとするのは、ある種のイデオロギー的な操作ともいえる。

それはともかく、冒頭で指摘した19世紀における「ポピュラー」と「クラシック」の親和性（common practice を基盤とすることによる相互転換の容易さ）が、一見「2大カテゴリーの対立」と見える状況に実はしっかりとしたつながりをもたらしていたこと、「2大カテゴリー」のイメージの中で等閑視されがちだった19世紀のポピュラー音楽文化が実際には音楽文化全体に大きな影響力を持っており、その更なる見直しが必要であること、を確認しておきたい。

註

- (1)主に音楽理論関係の英語文献で、しばしばバロック、古典派、ロマン派をまとめて common practice era ないし common practice period と呼ぶ例がみられる。初出は不明だが、論文タイトルには1970年前後から現れ、2000年前後から頻度が高くなるように思われる。*New Grove* には立項されていないが *Wikipedia* には項目があり (*Wikipedia contributors* 2021)、*Britannica* では 'Harmony' の項目中で使用されている (Rich 2019)。
- (2)「クラシック」「ポピュラー」ともに common practice から離れていった、と言っても良い。
- (3)こうした見解を日本ポピュラー音楽学会第28回大会のシンポジウム「クラシック音楽におけるポピュラリティの諸相」(立教大学、2016年12月3日)で発表した。
- (4)Spike Jones and his City Slickers。我が国のクレイジーキャッツらに大きな影響を与えた楽団。曲のアレンジや演奏スタイルに滑稽な要素を盛り込む一方、彼ら自身もコメディアンとしてコントを演じ、音楽エンターテインメントの一つのスタイルを作り上げた。演奏スタイル自体はニュー・オルリンズ・ジャズのスタイルが基調だが、取り上げるレパートリーはクラシックや民謡を含む幅広いものであった。
- (5)コンピレーション・アルバム *Spike Jones The Absolutely Essential* (英 BIG3 BT 3033) の Disc One 第3曲。出典は1946年5月録音の初録音 (RCA Victor D6-VB-2065) だと思われる。
- (6)キーは譜例1に合わせて移調してある。
- (7)1920-30年代のジャズのスタイルのひとつ。当時シカゴのコットン・クラブでは「ジャングル風」のショーを売り物にしており、そこに出演していたデューク・エリントンらがそれに合わせて、響き線のない太鼓や吠えるような (growl) トランペットを多用した独特のサウンドを生み出した。Tucker 2003参照。
- (8)「第3部はクラークの《ヴェニスの謝肉祭》による」という記述がハリー本人の同意を踏まえたものか、パーデューの推測なのか、は、原文でも明確でない。ここではパーデュー自身の推測だろうと考えておく。
- (9)大英図書館の所蔵カタログによる。
- (10)Herbert Lincoln Clarke (1867-1945)。スーザ・バンドの花形として活躍したホルネット奏者。そのかたわらニューヨーク・フィルなどでトランペット奏者も務めた。独奏曲の作曲のほか、いくつもの教則本を書いており、現在も用いられている。
- (11)Wynton Marsalis (1961-)。ジャズとクラシックの両方で活躍し、1980年代から「アメリカの古典芸術」としてのジャズの地位向上に貢献した。
- (12)この7区分は明記されていないが、各練習課題の通し番号が1から付け直されるところを数えている。
- (13)Wiedoeftの発音には末尾のtを読む場合と読まない場合があり、Rudyの場合どちらかは定かでないようである。日本語でのカナ表記もヴィードフ、ヴィードフト、ヴィーデフトなどあるが、ここではシーゲル2010に従ってヴィーデフトと表記する。
- (14)ニュー・ヨーク・タイムズ1927年4月17日のラジオ欄によると WJZ 放送で夜8時半から9時半まで中継されている。ソプラノとテノールの歌手が登場したことも確認できるが、曲目までは記されていない。

参考文献

【邦文】

- シーゲル、マイケル『サクソフォン物語——悪魔の角笛からジャズの花形へ』諸岡敏行 訳 (東京、2010)
- 吉成順 (2014a)『〈クラシック〉と〈ポピュラー〉——公開演奏会と近代音楽文化の成立』(東京、2014)
- 吉成順 (2014b)「増殖する『クラシック』——クラシックとポピュラーのその後」『アルテス』2014年4月号、84-87ページ

[欧文]

- Arban, Jean-Baptiste. *Grande méthode complète de cornet à pistons et de saxhorn* (Paris, 1864)
- Cottrell, Stephen. *The Saxophone. (Yale Musical Instrument Series)*. (New Haven, 2012)
- Foreman, George C. "Levy, Jules." *Grove Music Online*. 24 Feb. 2010; Accessed 19 Sep. 2021. <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-1002085296>.
- Garfield, Eugene. "Current Commentary: How Rudy Wiedoeft's *Saxophobia* Launched the Saxual Revokution." *Current Contents*, No.10, p. 3-5, March 6, 1989
- James, Harry. and James, Everette. *Trumpet Methode A School of Modern Trumpet Playing*. (New York, 1941)
- Mirtle, Jack. *Thank You Music Lovers: A Bio-discography of Spike Jones and his City Slickers, 1941 to 1965* (New York, 1986)
- Musik Fabrik Musik Publishing. "Rudy Wiedoeft Biography." *Classicalmusicnow*, 2011, <http://www.clasicalmusicnow.com/wiedoeft.htm>. Accessed 21 Sep. 2021.
- Par-Due, Chuck. *Harry James-Trumpet Icon: The Music of the 20th Century's Most Famous Trumpet Player* (Seattle, 2020)
- Rich, Alan. "Harmony". *Encyclopedia Britannica*, 9 May. 2019, <https://www.britannica.com/art/harmony-music>. Accessed 10 Sep. 2021.
- Shaw, Artie. *Clarinet Methode. A School of Modern Clarinet Technic*. (New York, 1941)
- Tarr, Edward H. "Arban, (Joseph) Jean-Baptiste." *Grove Music Online*. 2001; Accessed 20 Sep. 2021. <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000001162>.
- Tucker, Mark. "Jungle music." *Grove Music Online*. 2003; Accessed 18 Sep. 2021. <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-2000240200>.
- Young, Jordan R. *Spike Jones and his City Slickers* (Beverly Hills, 1982)
- Vermazen, Bruce. *That Moaning Saxophone The Six Brown Brothers and the Dawning of a Musical Craze*. (Oxford, 2001)
- Wiedoeft, Rudy. *Rudy Wiedoeft's Complete Modern Method for the Saxophone*. (New York, 1927)
- Wikipedia contributors. "Common practice period". *Wikipedia, The Free Encyclopedia*. https://en.wikipedia.org/w/index.php?title=Common_practice_period&oldid=1040808429, Accessed 9 September 2021.

付記

スパイク・ジョーンズとハリー・ジェイムズの曲の類似性を知らせてくれた平成28年度修士課程修了の渡辺菜月さん、ブラウン・ブラザーズとヴィーデフトのことを教えてくれた現在博士課程の黒田真帆さん、アーティ・ショーの協奏曲と教則本を知るきっかけをくれた現在修士課程の立石春花さんに感謝します。たくさんの学生たちに支えられ、教えられてやってきました。ありがとうございました。